

第27回大会・概要と成果

スタンダード化時代の教育リーダーシップ

—— スタンダードと評価に基づく教育改革を問う ——

仲田康一

(大東文化大学)

教育のスタンダード化は、グローバルな教育改革における一つのキーワードとして、先進諸国で一般的にみられるようになってきている。他の公的領域の改革にも影響されながら形成されてきたこの潮流は、①テストによって測定される学習成果により大きな強調点を置く、②学校をビジネスのように運営させ、学校や教師の成功と不成功を二項対立的に評価するような学校内部の民営化を推し進める、③国の教育政策として、教材、学校改善のノウハウの売買、民間団体の学校運営への参画などを可能にするような外的な民営化、④教職の専門性をしかるべきデータの産出過程に置き換えるような脱専門職化など、様々な教育上の改革を含んでいる。

こうした新しい環境の下で、改革の成否を分けるものとして着目されているのが校長のリーダーシップである。スタンダード化を志向する諸改革は、校長を含む教育専門家の専門性を政策的に定義しなおすものであり、その充足感 (well-being)、アイデンティティ、そして実践をも作り変えようとするものである。

ゲストスピーカーであるマンチェスター大学のヘレン・ガンター教授は、学校リーダーシップ研究の第一人者である。学校リーダーシップに関する様々な見解の中で、主流のディスコースがいかにして権力関係と結びつきながら編成されてきたかを明らかにする、いわば知識生産の政治的・史的研究が彼女の仕事である。リーダーシップ論を鏡に、数十年にわたる新自由主義的教育改革がいかなる社会的帰結をもたらしているか、さらには公教育の在り得べき姿はいかなるものかについて、フーコー、バーンスタイン、ブルデュー、アレントなどを駆使して論じている。

日本側パネリストの一人は、福岡市教育センターの元主浩一氏 (元福岡市立東光中学校校長) である。同氏は、困難集中地域における学校改善を率いてきたことで知られる。同氏の議論をガンター教授の議論とひきつけて文脈づけるならば、第一に、教育者としてではなく経営者としてのリーダー像が主流になっている中で、授業改革を軸に教育的リーダーシップを発揮していること、第二に、私的利益が強調される一方で社会的制約が顧慮されず、結果として学校のセグリゲーションが進行している中で、困難集中地域の子どもたちの学習権に焦点を当てた改革を進められていることがその特徴と言えるだろう。

日本側からは、東京大学大学院の勝野正章教授にも登壇いただいた。日本におけるリーダーシップ改革についてご自身が進めてきた政策分析を、アンケートや聞き取り調査の結果を踏まえてご紹介いただいた。英国と比べれば新自由主義改革の到達は遅く、その深度も比較的には緩やか

とされる日本にあって、リーダーシップ強化の改革がいかなる影響を与えてきているのか。改革の受け止め方について、教師と校長の間に大きな評価の差があること、同様にトップ・ダウン型の経営像が広がっているが、そのメカニズムとして日本の縦社会的・家父長的文化の影響を看取できること、などについて言及があった。

当日は、ゲストスピーカー、パネリストの議論とともに、当日の参加者との活発な質疑応答によって有意義な議論ができた。これまでに掲載されている3名の充実した講演録からも、議論の密度を押し量ることができるだろう。